

発達障害の描画研究の展望：主に人物画に焦点を当てて

東海学院大学人間関係学部心理学科 明 翫 光 宜

1. はじめに

発達障害の心理アセスメントに知能検査や K-ABC などの認知検査が活用されている。その一方で、従来から使用されている投映法も活用されるようになった。ロールシャッハ・テスト、PF スタディや描画法である。投映法の解釈仮説の基礎理論になっている精神分析学の象徴解釈を発達障害のアセスメントそのまま使うのではなく、発達の視点を導入して状況理解や認知発達を捉える視点として活用する工夫が見出されている（例えば、明翫・内田・辻井，2005；明翫・辻井，2007；満田・明翫・辻井，2009）。

本論文では、これまで発達障害の描画研究がどのように行われてきたかを整理し、今後を展望することで、描画による発達障害の心理アセスメントならびに基礎研究に貢献したい。

2. 発達障害における人物画研究

人物画研究は、これまで実に多くの研究が行われてきた。しかし、発達障害領域における人物画研究はそれほど多くはない。発達障害領域における初期の人物画研究は、感覚統合療法のアセスメントにもあるように主に精神遅滞児や学習障害児を対象にした研究が盛んに行われた。

(1) 中枢性運動障害児を対象とした研究

脳性マヒ児の人物画研究では、木船（1984）は脳性マヒ児 64 名に対し、DAM、WISC-R、ベンダー・ゲシュタルト・テスト（以下 BGT）を実施し、DAM の並存的妥当性を検討した。その結果、ベンダー IQ、PIQ、VIQ ともに有意な相関係数を示し、精神遅滞児や定型発達児を対象とした結果よりも高い傾向にあった。また偏相関係数の分析と重回帰分析から、VIQ は DAM-IQ との間に有意な偏相関係数を示さないこと、DAM-IQ の測定するもの大部分は BGT によって説明可能であること、PIQ は BGIQ には及ばないが有意な関係を DAM-IQ との間に持つことを示した。

長崎（1990）は、中枢性運動障害児と一般中学生を対象に DAM、方向弁別、空間関係の 3 つの研究を行った。その結果、中枢性運動障害児の特徴として不正確な

情報によって形成される身体イメージ、左右の方向感覚の未確立、空間内の具体的なイメージ操作の困難が認められ、身体イメージと空間認知の間に共通の反応特性があると論じた。その共通性とは「いくつかの要素を 1 つの全体にまとめて捉えることの難しさ」であり、具体的には身体像がバラバラな部分の寄せ集めであったり、歪んだ形で捉えられているとき、それが空間に対する見え方に投影されていると長崎は考察している。

このように見ていくと、中枢性運動発達障害の人物画は、BGT と相関があることや彼らの身体図式を理解するのに有効であることが示唆される。

(2) 精神遅滞児を対象にした研究

精神遅滞（以下 MR とする）児に関する研究では、松田（1973）は、特殊学級に在籍する児童 141 名の人物画の分析から以下のことを述べている。(1) IQ=35 以下ではなぐり書きのようなもので人物画らしきものが描けない、(2) IQ=36～45 では全然描けないものはほとんどなく、全体のバランスがおかしいことや省略が見られやすく、ステレオタイプの絵が多い、(3) IQ=45～55 では人物の全体像がだいたい描けるようになり、年齢の上昇とともに発達が見られる、(4) IQ=56～65 では年齢による発達が一層はつきりしており、写実的な傾向が見られるようになり、テレビや漫画の影響を受けていると思われる絵がある、(5) IQ=66～75 では全体像はバランスを保って描かれている。服、ズボン、スカートなどは型や模様を描いたり、動きを表現したりしている。また横向きの絵が出現する、(6) 全体的な傾向として IQ=50 前後を境に発達過程に違いが認められ、低い段階では発達のテンポが遅く、ステレオタイプな絵になりやすい。一方、高い段階では発達のテンポも比較的早く、発達過程もはつきりしていて、徐々に写実的な絵へと向かうという特徴である。

多田・窪田（1980）は、定型発達児群 26 名、MR 群 6 名を対象に DAM の結果を 2 週間おきに 6 回試行し、その結果を分析した。その結果、MR 群は発達が停滞し、内容も固執的であること、定型発達児の人物画の発達では 3 歳台では発達が著しくないが、4 歳に入ると著しく

なり、4～5歳の間に頭足画の時期をはさんで急速に人物画が描けるようになることを見出した。

眞田 (1980a) は、MR 児 (31 名) の DAM と WISC とを比較を行った。その結果、DAM-IQ と WISC の相関は $r=.57$ 、DAM-MA と WISC では $r=.75$ であった。また DAM-IQ と WISC-IQ の平均値を比較したところ、WISC-IQ が有意に高かった (その差は平均 10 点程度である)。眞田は DAM-IQ よりも DAM-MA の方が WISC と高い相関を示す可能性があること、比較的生活年齢の高い群で DAM と WISC の相関が高い傾向があることを報告している。さらに眞田 (1980b) は、中度 MR 児 (58 名) の DAM と BGT について発達の側面から分析した。その結果、(1) CA (生活年齢) が上昇するにつれて BGT 得点は有意な発達の变化を示し、DAM 得点は有意水準には至らないながら発達の傾向が予測された。(2) MA (精神年齢) が上昇するにつれて BGT と DAM 得点は 1% 水準で有意な発達を示し、MA6 才台における発達が大きい。(3) DAM と BGT は実質的な相関が得られたことを報告した。

古屋 (1982) は、Koppitz (1968) の情緒指標を用いて MR 児の人物画分析を行った。情緒指標の平均点および情緒指標が 2 個以上の該当率が定型発達群に比較して有意に高かった。また MR 群に多く該当した情緒指標は、「部分の統合不全」、「四肢の大きな非対称」、「手の切断」、「口の欠如」、「胴体の欠如」、「腕の欠如」、「脚の欠如」、「足の欠如」であったと報告している。古屋は情緒指標の分析から MR 児に不安定感、精神的未熟、引っ込み思案、社会性の欠如、情緒障害、衝動性があることを示唆している。

木船 (1980) は、主に MR 児の人物画知能検査の併存的妥当性に関する研究を進めている。従来の MR 児を対象にした先行研究では、PIQ は VIQ よりも DAM-IQ と相関係数が高く、動作性知能との関連が考えられている。しかし、木船よれば PIQ と VIQ の間には高い正の相関が認められること (児玉・品川, 1963) から、DAM-IQ と PIQ、DAM-IQ と VIQ の疑似相関として高く算出される恐れがあることを指摘した。この疑似相関を避けるために「偏相関係数」による分析が必要であると強調している (木船, 1984)。偏相関分析の結果、田中ビネーとの関連において、定型発達児よりも高い相関を示し、DAM は MR 児の知能測定に有効性を示すことを指摘した。また重回帰分析の結果、DAM-IQ はビネー IQ や CA 以外に適応障害や性格、情緒などの要因から決定されるのではないかと考察した。WISC との関連においては言語性知能と動作性知能のいずれが優位であろうとなかろうと、また脳性マヒ、MR の障害の種類を問わず、DAM は動作性知能と関連が深い検査

であることを報告した (木船, 1984)。さらに木船・中島 (1988) は、WISC では PIQ、FIQ、VIQ の順に相関が高かったが偏相関係数では BGIQ のみ男性画 IQ と有意であったこと、重回帰分析でも BGIQ のみ男性画 IQ に有意な説明が可能であったという結果を見出している。その結果から、木船・中島は、DAM は視覚、触覚、聴覚などの多くの感覚に基づく身体各部の分析・評価、空間関係や位置の分析・判断などの心理的過程が関係するので、知能検査というよりは視覚・運動能力の検査に点に加えて、Body-image という考えを取り入れて総合的に分析していく必要があると述べた。木船 (1995) はこれらの一連の研究をまとめ、人物画による身体像測定が十分な信頼性と妥当性があることを示している。

田辺・田村の研究は、MR 児の認知発達と身体像との関連を探る一連の研究を行った。田辺・田村は、田中 (1977) の「可逆操作特性の高次化における階層一段階理論」に準拠して、MR 児の人物画を分析している。田辺・田村 (1986) は、操作特性の高次化によって人物画も全体の形を捉えた、まとまりのある描写へと発達の変容を示し、また図形模写と人物画の間に密接な関連性があることも確認している。田辺・田村 (1987) は、MR 児の人物画において、眼・口・鼻・頭部・腕・脚といったいづれの身体部位も操作特性の高次化に伴って分化していき、身体部位による発達の順位性と一定の傾向が認められた。また K 式発達検査の通行項目の分析から、描画において示される身体像の発達と図形模写・模様構成・段階再生などの課題に見られる空間関係の把握・操作能力の間に一定の関連性を見出している。田辺・田村 (1988) では、これまでの横断研究から示されたように操作特性の高次化に伴って人物画の発達の変容があること、人物画描画能力の発達は図形模写をはじめとする様々な要因が関わっているという知見を 4 名の MR 児の縦断的な資料を用いて検証し、同様の結果を確認している。田辺・田村 (1989) では、MR 児の人物画からボディ・イメージの発達を検討した。DAM と「手指の模倣課題」、「身体各部の自己の指示課題」、「身体各部の他者の指示課題」との相関関係において手指の模倣課題の得点のみ有意な相関を示したことから、従来から指摘されているように DAM は MR 児の動作性知能あるいは視覚、運動能力の発達水準を反映していることを確認した。

このように活発に発表されてきた MR の人物画研究であるが、1990 年代以降に入ると次第に報告されなくなっていった。これは 1990 年代後半より、学習障害を主とした軽度発達障害のアセスメントに焦点が向けられるようになったためと考えられる。

(3) 学習障害児を対象にした研究

学習障害（以下LD）児を対象にした研究では、初期の代表的な研究として Ayres(1974)の研究がある。Ayres は知覚障害が疑われた 100 名の児童に対して人物画を含んだ知覚-運動検査バッテリーを実施した。人物画と知覚-運動検査の相関分析から、人物画は神経心理学的モデルによる身体図式を測定するには限定された指標であり、むしろ視知覚と鉛筆での描画能力に対して有効な指標となりうると指摘した。

中山・市川・松田・立川・二上・前川（1996）の研究が、これまでのLDの人物画研究について展望している。LDの心理アセスメントにおいてDAMは頻繁に利用され、知能検査の結果に比較してDAMの成績が低いということがこれまでの研究しばしば報告されてきた。またDAMの妥当性研究ではWISCとの相関分析を中心に行われてきているが、そこではDAM-IQ < FIQPIQVIQ という結果であり、WISCとの相関も定型発達群よりも低いことが報告されている。これらの先行研究を基に中山らは、DAMとWISCの検討を行った。その結果、ほぼ全てのDAMの結果はWISCのいずれのIQよりも有意に低かった。またDAM-IQとPIQの相関が高いが、PIQ優位型についてはDAMとの関連性は認められなかった。これらの結果から、中山らは言語性IQ、動作性IQという枠組みではDAMの測定しているものを十分に説明できないと指摘した。LD児の人物画の特徴として基本的部位の抽出は可能であるが、縦と横の比率や部分の位置関係、人物の細かな部分ほうまく抽出されず、精緻化しない傾向があることが示された。また中山らは、従来人物画は身体図式が反映されるとしばしば述べられてきたが、先行研究では検証されてきていないことを指摘し、むしろ人物画を描いて行く中でのプランニング

に注目する必要があると問題提起している。

近藤（1998）は、36名のLD児の人物画をKoppitz法で分析を行った。発達項目では、鼻（55.6%）、首（48.3%）、正しくつけられた腕（27.8%）、正しい指の数（37.1%）、衣服得点が0～1（66.7%）、バランスの通過率が低かった。情緒指標においては、四肢の非対称、傾斜像、短すぎる腕、鼻の欠如、首の欠如の該当率が高かった。これらの結果は人物画の明細度の低さを示しており、MRでは身体部品に関する情報量の不足が考えられるが（小林，1977）、LD児の場合は経験を象徴化し、記憶・体系化していく学習過程の問題が想定される。つまり、身体への細部への注意力が未発達という注意の障害や認知の偏りが描画全体に影響していると近藤は考察している。

野本（2000）は、言語性LD（VLD）と非言語性LD（オリエンテーションの障害・運動障害：NLD-OCと社会的認知の障害：NLD-S）のサブタイプに分類し、そのLD児のサブタイプの特性を捉えるために、人物画の全体像の評定を加えて検討を行った。野本は、(1) NLD児は運動面が人物画に反映され、イメージを抱くことに問題を持つために、描画拒否が起こる、(2) VLD児は情緒的な面が反映され、描画拒否が起こると考えた。NLDのサブタイプとして、(3) NLD-C児は人物イメージを持っているが運動に問題を持つためにイメージに近い絵の構成が困難であり、DAM-IQが低くなる、(4) NLD-Sは人物のイメージの乏しさから人物画表現が困難でDAM-IQが低くなると考えられた。これらのサブタイプ間の人物画特性の違いを捉えるのに、Goodenough法では全体像の描き方の項目は少なく、身体部分を明細に描くと高得点になるため新たな全体像の評定が必要であると指摘した（Table1）。

Table1. 野本（2000）による人物画の全体像の評定と結果

構成項目				
項目	概要	NLD (N=19)	VLD (N=19)	x ² -test
大きい	A4の1/2からはみ出す絵	4(21%)	3(17%)	
小さい	A4の1/8未満の絵	2(11%)	5(28%)	
傾き	絵が15°以上回転している	2(11%)	0(0%)	
非対称	1対の身体部位の面積が倍以上異なる絵	7(37%)	2(11%)	NLD > VLD*
はみ出し	用紙内に絵がおさまらず、はみ出ている	4(21%)	3(17%)	
紙辺使用	用紙の辺から1cm以内で辺を利用して描いている絵	0(0%)	3(17%)	VLD > NLD*
頭足画	頭部から直接手足が描かれている絵	0(0%)	0(0%)	
白い目	目が塗りつぶされず、線のみで円形に描かれている絵	3(16%)	2(11%)	
イメージ項目				
自分と同性	絵が被験者と同じ性の絵	15(83%)	17(94%)	
ほほえみ	口角が上がり、Uの字または半円型になっているもの	5(26%)	11(61%)	VLD > NLD*
キャラクター	明らかにテレビや漫画の主人公を描いているもの	1(5%)	0(0%)	
未完成	完成せず中断している絵	0(0%)	3(17%)	VLD > NLD*
部分	体の一部のみの抽出	15%	0(0%)	
模写	自分の身体を見ながら描くなど外界の対象を見て描いた絵	5(26%)	0(0%)	NLD > VLD**
人以外	人物以外の抽出	3(16%)	1(6%)	
塗りつぶし	人物画のある部分を塗りつぶしている場合	2(11%)	3(17%)	

*...p<.10, **...p<.05

森永・野本（2001）は、VLD、NLD-OC、NLD-Sのサブタイプに分類して、人物画の比較を行ったところ、(1)VLDとNLDでは人物画を構成する構成要因が異なり、VLDでは定型発達児に近く、全般的に整っている傾向があった。VLDとNLDの比較ではNLDの割合得点が有意に高く、絵のバランスの不調が認められ、人物のイメージ化が困難であることが示唆された、(2)NLD間においてもNLD-OCとNLD-Sは明らかに異なるタイプであることが示唆された。

森永・野本も指摘しているがNLD-S児の状態像は広汎性発達障害と重なる部分が少なく、その後の描画研究も広汎性発達障害にシフトしていき、LD児を対象にした人物画研究は発表されなくなっている。

(4) 広汎性発達障害児を対象にした研究

広汎性発達障害（以下PDDとする）を対象にした研究は、近年注目され、報告が相次いでいる。PDDの人物画研究を以下の3つの側面から概観する。

1つ目は、知能検査などの心理検査との相関研究である（Table2）。

一門・山下（1983）では、53名の自閉症児に対してDAMと田中ビネーとの対応を検討し結果、DAM-MA、DAM-IQともにビネーMA、ビネーIQよりも低い結果であった。中野・勝野・栗田（1992）の研究では、自閉傾向が高くなると人物画描画能力が低くなること、人物画IQがビネーIQよりも劣る例が多かったと報告している。栗田・中野（1997）は、PDD群、MR群、ADHD群の3群で知能検査とDAMの関連を検討した。その結果、DAM-MAは3群とも年齢よりMAと相関が高く、CARS-TVとは無相関であった。ADHD群は、PDD群やMR群よりも相対的に人物描画能力が劣り、またPDDの下位群ではアスペルガー症候群がADHDに近いパターンを示したと報告した。志水・長田・中野・渡辺・栗田（2003）は、(1)アスペルガー障害群とADHD群が類

似していること、(2)高機能PDD群では相対的に人物画描画能力が低いことを示唆している。このようにPDD群のDAMの結果は、知能検査のIQよりも低いことが報告されている。一方、全般的知能に比べて人物画描画能力が高い傾向があるという研究も報告されている（渡辺・長沼・瀬戸屋・長田・立森・久保田・栗田，2002）。

心理検査との関連では、渡辺ら（2002）は自閉症の症状の程度を示すCARSとの相関が低いことから、人物画は全般的知能の発達と関連があることを示唆している。さらに、人物画描画能力の発達をビネーと比較してPDD群をDAM優位型群とDAM＝ビネー型群とに分類し、CARS-TVの各項目を比較したところ、DAM優位型群は、対人関係や模倣、コミュニケーション、視覚的な反応について自閉傾向が有意に高かった。このことから、DAM優位型のPDD児は、一般的に大人や子どもとの関わり（コミュニケーション、遊び、模倣）を通じて人間のイメージを作り、自分のイメージを何度も描き、人物画を発展させていく一般の人物画の発達のプロセスとは異なる可能性を示唆した。Lim & Slaughter（2008）は、21名のアスペルガー症候群と28名の定型発達群にHTP法を用いて比較した。木と家の得点について有意差は認められなかったが、人物画得点についてはAS群が有意に低かったという結果を見出している。また人物画得点とバイナランド適応行動得点（コミュニケーション領域）との間に有意な正の相関があったと報告している。なお、定型発達群のデータにおいては両者に有意な正の相関は認められなかったという。これらの結果からLim & Slaughter（2008）は、AS群は全般的な描画能力は問題ないが、人物画など特定の描画能力に問題があること、詳細な人間表象を持たないこと、人物画を描く動機の低さ、描画順の違いなどの特徴を述べた。

これらの一連の研究から、DAMと知能検査の比較では統一的な見解がないこと、心理検査との相関研究から（Table2）からは、知能検査や生活年齢、コミュニケーションの発達と関連があることが明らかになっている。

Table 2. 人物画得点とその他の心理検査の相関研究の一覧

先行研究	人物画の評定	知能検査	年齢	その他の心理検査
一門・山下（1983）	DAM-IQ	.43		
渡辺ら（2002）	DAM-MA	.56	.52	CARS-TV -.02
志水ら（2003） ① 自閉性障害 ② アスペルガー障害 ③ 特定不能の広汎性発達障害 ④ 高機能自閉症 ⑤ アスペルガー障害（IQ70以上） ⑥ 特定不能の広汎性発達障害（IQ70以上）	DAM-MA	① .72 ② .92 ③ .60 ④ .70 ⑤ .70 ⑥ .92	① .57 ② .64 ③ .88 ④ .68 ⑤ .67 ⑥ .88	
Lim & Slaughter（2008）	① Buck 法 ② Koppitz 法			バイナランド適応尺度 （コミュニケーション） ① .37 ② .41

2つ目の流れは、DAM項目やKoppitz(1968)の発達指標・情緒指標の項目の通過率や特徴からPDDの人物画特性を探る研究である。

一門・山下(1983)では、「胴」、「衣服」、「指」、「脚」、「衣服全部」、「腕の長さ」の通過率が有意に低く、全体としてアンバランスであることを示唆した。Koppitzの情緒指標では個々の指標に対する解釈は難しく、「非現実的なパターン化された像」、「荒く不安定な描線」、「表面的な性差の抽出」などを指摘した。以上のことから、一門・山下は身体図式の希薄さ、不器用の問題、対人関係の障害を示唆した。

畠山(1984)は、Body proportion(身体比率)の視点から発達障害児31名(MR児15例、脳性マヒ児11例、ダウン症児2例、自閉症児3例)の人物画を分析した。畠山は発達障害児全般として分析しており、その中で以下の特徴を指摘している。(1)ほとんどの事例が胎児型あるいは胎芽型を示している。(2)頭足人の表現型が2例示している。その表現も定型発達の3歳児のそれとは異なり、頭部や上肢に部分的な発達が見られる。(3)一般的に下肢の表現が未発達である。(4)人物像の胴体部の形の表出が幼児の表現系に似た様式を示している。畠山は自閉症児の3例については入浴指導などによる積極的な身体図式の形成といった指導効果が人物画に現れることにも注目している。

田村(1987)は、先に述べた田中の「可逆操作特性の高次化における階層一段階理論」に準拠して、自閉症児の人物画を分析した。MR児の場合は操作特性の高次化に伴って全体像の描写表現が多様化し、柔軟な人間像へと変容していくが、自閉症児の場合は人間像としてまとまりがあるが、硬直した人間像が固定化していくといった傾向が認められたことを報告している。

藤本・磯部・山田・伊藤(1991)は、自閉症群は一般的な知識として身体に関する情報は抽出できるが、比率や明細度など詳細な情報が困難であることを報告した。また藤本らは、DAMは発達の順序に従って採点項目が配列されている点に着目し、非自閉症群や定型発達児群は大筋この順序に従っているが、自閉症群は発達順序に従わず、スキッターが多かったことを報告している。

永田(1999)は、高機能PDDのDAMの経験からDAMの成績が著しく低いことが多いことを述べている。DAM-IQが高かったとしても、細部に対するこだわりから一部のみを詳しく描かれたりとその身体図式のバランスが悪く、知的能力とDAMの成績の乖離が認められることが多いと述べている。

末次(2003)は、言語性LD、非言語性LD、高機能自閉症、ADHD、境界線知能の5例の事例について人物画を通して分析を行った。その結果、発達障害児は、「低い自己評価」、「弱い身体イメージ」、「特定部分への固執」、「知的レベルに比較して低い描画能力」、「独特な発達の变化」の5つの特徴を示した。

近藤(2003)は、アスペルガー障害の男児事例の約6歳から12歳までの間に描かれた15枚の人物画をGoodenough法ならびにKoppitz法によって分析した。定型発達児に比較してアスペルガー障害児は約3年の遅れを見せながら描画が発達していくこと、知的能力と人物画テストの成績の乖離、身体の一部を詳しく描く傾向、描画全般における統合不全、非相称、部分の欠如、全体のバランスが悪いなど、描画に心理的付加を加えることの少ない傾向である。またアスペルガー障害の人物画を理解するのにKoppitz法が有用であることを示唆した。

是枝・東條(2004)は、自閉症児は全体的に目や口、手や足など、身体の基本的な部分の描写はクリアーできるが、胴体の長さの割合や腕の付け方(体幹の横から腕が出ていて、肩の所から出ていないなど、通過率は55%)、頭や足の割合(頭や顔が極端に大きいなど、通過率は45~65%)など、身体全体のバランスの描写がやや欠けると報告した。これらの傾向は、身体図式の未熟さや認知特性などが人物像を視覚的にイメージして、限られた紙面上に全身のバランスを考えて描画していくことに、少なからず影響を与えていると是枝・東條は考察している。

小坂・生天目・中村・久米・谷口・中川・十一(2008)は、不登校で来談したPDD児の事例研究において、瞳がない、手の指が描けていない、衣服が簡素であるという人物画の特徴を指摘している。

望月(2008)では、PDD群が「首」、「首の輪郭」、「脚の割合」において不通過が有意に多かったことを報告した。その他、定型発達群は、間接の表現、顎の抽出、拇指の分化の表現など高度な人間らしい抽出表現になっていくのに対して、PDD群は、眼、口や手足のつき方などの基本的な抽出が不正確である傾向があった。掌や衣服の抽出の細かさ、輪郭をもって口や鼻を描く、鼻の穴を描くなどの細かさが認められた。描き順において、定型発達群は例えば「頭→髪→顔」などある程度のパターンが存在したが、PDD群においては実に様々なパターンが認められた。定型発達群の人物画は、小学校1年生で基本像がほぼ完成し、完成後は手足の関節やバランスなど全体像としてまとめ上げていく傾向があるのに対

して、PDD 群は小学校 3 年生で基本像が完成し、その後は全体像よりは部分の細かさの抽出に向かうと考察している。

以上の先行研究から、PDD 群は人物画の基本的な部

分を抽出できるが、比率など身体の全体像を踏まえてバランスよく描くことが苦手であることが一貫して述べられている。ここでいったん先行研究からの知見をまとめると Table3 のようになる。

Table 3. PDD の人物画研究の知見

人物の部分	胴の通過率が低い（一門・山下，1983） 指の通過率が低い（一門・山下，1983） 脚の通過率が低い（一門・山下，1983） 首の通過率が低い（望月，2008；小坂ら，2008） ＊顔以外の部分に関しては通過率が低いものが多い
部分の比率	腕の長さの通過率が低い（一門・山下，1983） 胴の長さの通過率が低い（是枝・東條，2004） 頭の割合の通過率が低い（是枝・東條，2004） 足の割合の通過率が低い（是枝・東條，2004） 脚の割合の通過率が低い（望月，2008） ＊全般的に部分の構成や全体と部分の関係が捉える力が弱いと推測される。
部分の明細度	衣服の通過率が低い（一門・山下，1983） 衣服全部の通過率が低い（一門・山下，1983） 腕のつけ方の通過率が低い（是枝・東條，2004） 瞳の通過率が低い（小坂ら，2008） 首の輪郭の通過率が低い（望月，2008） 衣服の細かさの通過率が高い（望月，2008） 鼻と口の輪郭の通過率が高い（望月，2008） 掌の通過率が高い（望月，2008） 鼻孔の通過率が高い（望月，2008） ＊人物の基本的部分のうち通過率が低くない「顔」に関して、顔を構成する細部については通過率が高い。一方、顔以外の部分については基本的部分の抽出の失敗と同時にかなり細かな明細部分の抽出がある。
印象	・身体図式 人間の一部分のみを詳しく書くなど身体図式のバランスが悪い（永田，1999；末次，2003；近藤，2003；望月，2008） ・人物画の特性 硬直した人間像の固定化（田村，1987） 統合不全、非相称、部分の欠如（近藤，2003） ・人物画の発達 発達順序に従わず、スキッターが多い（藤本ら，1991） 独特な発達的变化（末次，2003） 定型発達群と比較すると約 3 年の遅れがある（末次，2003） 定型発達では小学校 1 年生で基本像が完成するが、PDD 群は小学校 3 年生で人物画の基本像が完成する（望月，2008）。 ・DAM の総合的指標との関連 DAM の成績が著しく低く、知的能力と DAM の成績に乖離がある（永田，1999；末次，2003；近藤，2003）

また PDD の描画研究から、特異性が次第に明らかになっているが、現状の人物画の評価法では PDD の描画過程や要素間の関連に注目していないため、評価法そのものを検討する必要がある。今後は PDD の描画特性を踏まえながら、人物画の描画過程について注目する必要がある。

3 つ目の流れは、治療効果の査定のための人物画の利用である。小林 (1977) は、2 歳 9 ヶ月の自閉症児 (女児) の療育過程を人物画の発達過程を通して、治療効果を報告している。金田 (1982) は、1 名の自閉傾向を示す重度 LD 児の療育過程で、4 枚の DAM を報告した。1 枚目 (3 歳 8 ヶ月) は、胴体がないが、頭髪らしきものがあつ

た。2 枚目 (3 歳 10 ヶ月) は、目、鼻、口は同じだが頭をおおうように頭髪を描き、耳が出現した。3 枚目 (4 歳 4 ヶ月) は、眉が出現する、円の目から横長の目へ変化した (この時期に語彙力が増加した)。4 枚目 (6 歳 1 ヶ月) は、胴体、腕、足、手、指、瞳が描かれたというように発達に応じての人物画の変化を示唆した。

Seifert(1988) は、1 名の自閉症児の 12 歳から 16 歳までに至る治療過程における 47 枚の人物画を Machover の理論を用いて分析し、人物画は心理療法過程を査定するのに役立つことを示唆した。人物画を含めた描画の発達研究としては、田原・菅原 (1996) の研究がある。田原・菅原は、自閉症児がどのように外界を

取り込みながら自己像の形成と対人関係を広げていったかを描画の分析を用いている。その分析から自分の身体を知ることから役割意識の表れに至るまで8段階の変容プロセスを見出した。自分の身体図式を確立することで自己の構成がなされ、意識が複数の人へ移り、対人関係が広がっていった（外界の構成）と考察している。

浜谷（1990）は、ある自閉症者の20年間で描いた絵を「立体型」、「記号型」、「恐怖型」、「平穩型」、「現実型」、「埋め尽くし型」に分類し、その変遷を分析した。従来、自閉症者の絵は限られ偏った絵しか描けないと言われてきたが長期的視点に立つと多様な描画活動があることを示した。

毛利（1991）は、自閉症児（女子）の描画発達能力を1歳から6歳までの間に書いた絵を基に分析を行った。この事例では2歳で頭足人が描かれ、2～3歳で人物画の基本的要素は出現しており、その後の大きな変化はみられなかった。DAM得点やDAM-IQについて、この事例では身体部分の比率や明細度については極めて無頓着なため、DAM-IQは加齢とともに低下を示したことを報告している。

田村・田辺（1991）は、自閉症児の事例研究から、描画表現が発達過程の中でどのように変容を遂げていくのかを生活や教育実践との関連から検討した。描画表現活動は、生活経験を通してイメージを拡げ、展開していく中で育んでいくことが重要であると指摘した。この描画発達の中に人物画の分析も含めており、発達過程の中で「性差が明確になること」、「同性の頭部の表現が多様化すること」、「衣服の明細化が進むこと」、「全身像の部分の比率や部分の結合の仕方も正確になっていくこと」を経て「鼻孔」、「衣服の明細化」、「眼の型」などの部分の

比率や全体的なバランスが取れるなどの変化を記述している。この変化を部分と全体を統合し、一定の枠組みにまとめあげるといった「見通し（プランニング）」が出来るようになったことを指摘している。

大城・神園（2007）は社会性の発達との関連から高機能自閉症児の描画（人物画を含む）の変化を検討した。大城・神園は、事例の社会性の発達を、4歳3カ月を区切りとしてそれ以前を「行為と情動の随伴的他者理解」、それ以後を「意図的行為主体としての他者理解」と区分した。それに応じて描画の発達も「取り込み描画」から「内面が投影された描画」という質的に異なる描画が描かれたと報告している。大城・神園は特に人物画の発達の変化は社会性の発達をよく反映すると述べている。

このように治療経過の中で人物画を利用することは、治療効果の査定に有用であることがこれらの研究から示されている。

3. 広汎性発達障害の描画特性について

(1) 描画研究の知見について

PDDの描画特性について杉山（2002）の紹介がある。PDDの描画研究は、まず一部のPDD者に優れた描画能力があることに注目され、初期の発達障害の描画研究で紹介されてきた。海外のNadia事例（Arnheim,1980）を初めとする事例研究であり、非常に正確性の高い描画について話題を呼んだ。しかし、このような特殊能力を持つPDD者は少数派であり、次第に特殊能力を持たないPDDの描画研究に関心が移っていくことになる。臨床的な観点からの研究は、1990年代から海外を中心に行われるようになる。PDDの描画特性をまとめるとTable4のようになる。

Table 4. PDDの描画研究の知見

描画の特性
<ul style="list-style-type: none"> ・ 視覚的写実性：PDD児は見たものを見たまま正確に描こうとする傾向がある（Thomas & Silk, 1990；Eames & Cox, 1994）。これは対象把握の能力に障害がないことを示すとともに（今村・藤沢・小松・伊藤・小林・藤野, 1969）、<u>入力情報を違う形式に変換することの困難さが反映されていると考えられ、描画ではこのように視覚・空間情報を限定的で柔軟性のない方法で表現している</u> ・ 視覚的記憶を反映した写実的な表現（寺山, 2002）：<u>対象物を描くときは、実際の対象を見ながらではなく記憶によって描くが、描画の性質として写実的な表現になっている</u>。自閉症児の一部にはかなり視覚的情報の記憶力の高い者がいることが明らかになっている ・ 描画への投影の特徴：定型発達の子どもの絵は空間を起点として絵が描かれる「空想の投影」であるのに対して、自閉症児の絵は「<u>知覚の模写</u>」である（村上, 2007）。自閉症児は、<u>自分の身体の投影が行われていない</u>（村上, 2007）
描画技法
<ul style="list-style-type: none"> ・ 特殊な画法：<u>描画過程で絵を重ねる overlap</u>（例えば、自由画課題を与えられて好きなものを描くとき、空いた空間を無視するがごとく先に描いたものの上に重ねて描く）や<u>個々の要素を分離する fragmentation</u>に注目して描画を評定すると、自閉症児群にこれらの特徴が有意に多く該当するという。定型発達児の場合は、人間の概念は統合されやすいが自閉症児の場合この統一感に欠けていること（fragmentation）、注意の狭さ、統合の難しさ（overlap）がある（Fein,Lucci & Waterhouse,1990；松瀬・若林, 2001）

<ul style="list-style-type: none"> ・無機質な線密画（写真のような絵）（浜谷・木原，1990；和田野，1997；寺山・東條，1998）：通常4～9歳の子どもが透明画を描けないのは、視覚的経験を言語でもって概念化するためであり、その結果として象徴的・図式的な絵になる。一方、<u>自閉症児は視覚的経験を象徴化したり、カテゴリー化することが出来ないため、そのまま描くことになり、無機質な線密画になる</u>（Selfe, 1977）。それとは別にArnheim（1980）は、<u>自閉症児は知覚レベルの抽象化過程に問題があるとし（概念化された抽象的な視覚を持たない）、精密レンズのような正確さで物を見る</u>と言う。一方、<u>世界を強い視覚的なバイアスを持って見ていて、定型発達児の知的写実主義の後に達成する視覚的写実主義とは異なる</u>との指摘もある（Milbrath & Siegel, 1996；浜谷，1990）。PDDの認知特性として、全体を構成している「部分」に強くフォーカスが向く部分的な認知を行っている。この認知特性がこの描画特性に表現されたといえる ・独特な絵画表現（寺山，2002）：<u>全体を単純化・簡略化して、ある細部のみを目出せるような表現である</u>。細部に注目し、しかも細かすぎず簡略化した表現になっている。細部へのこだわり、意図的ではない細部の捨象などが反映されている ・複数の視覚イメージの合成・展開（寺山・東條，1998；寺山，2002）：<u>自閉症児は実際に対象物を見て描くというよりも、直観的に細かい部分を含めて全体像を把握していると推測される</u>。また細部の部分を自分の好きなように置き換える「<u>イメージの合成</u>」がある。さらにそれを基に物語として発展していく「<u>イメージの合成・展開</u>」が生じる。1つの形に他の形を置き換えると言った簡単な操作が可能になっている。つまり、映像による思考を使用している ・描画による図式機能は知能水準および同じ生活年齢の定型発達児が描いた絵に比較して大変優れている場合がある（Thomas & Silk, 1990）。 ・遠近法はなく、一側面からの描写（一側技法）など図式間の技法は単純技法を主としている（寺山，1996）。浜谷・木原（1990）は通常幼児期に優勢な描画技法を主に使用する時期が見られないと述べている
<p>描画の内容</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・限られた対象への関心の強さ（寺山・東條，1998；寺山，2002）：<u>自由画では描かれる対象物が限定される</u>。よく好まれるものに自動車、電車、換気扇、時計など動くものや回転するものが多い。非常に熱心に書き、他者の指示に影響されない（今村・藤沢・小松・伊藤・小林・藤野，1969）。これはTustin（1972）の自閉対象の概念からも説明できる ・人物画の少なさ：定型発達児と比べて絵の題材の好みが異なり、<u>特定の題材に対する強迫的な関心があり、人物画がめったに現れない</u>（Thomas & Silk, 1990）。描画の発達では、なかなか人物画が出現しないこと、乗り物の付属品のような人らしき形線の出現、<u>突然完成された人の顔面の描写</u>という定型発達児の発達過程とは異なる過程をたどった事例がある（長嶋，1997）。人物画を描く場合は、描画技法における定型発達児との違いはそれほど顕著ではない（浜谷・木原，1990）。人物画の出現は遅く、表現も自由画に比較して稚拙なものが多い傾向がある。また人物画の代わりにキャラクターを描く者が多かった（松瀬・若林，2001） ・自閉症児の描画に特徴的な表現として、上記の他に文字や記号の使用、抽象画的描画などが指摘されている（松瀬・若林，2001） ・感情の表出（寺山，2002）：<u>描画に感情表出が表現される</u>（浜谷，1990） ・色彩の使用について：自閉症児や情緒障害児の自由画には「赤」、「青」、「黒」の色彩使用が目立つ。一方、ダウン症児は「赤」、「橙」、「黄」の暖色と一部「黒」の使用色が多い（澤田，1984）。明るい鮮やかな色彩を好み、画用紙は全体または中央を使用する傾向がある（松瀬・若林，2001）。絵に色をつけることに興味を持たないという指摘もある（Thomas & Silk, 1990）
<p>発達の变化</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・自閉症児の発達によって描画の変化が生じることがある。例えば、Nadia事例では言語訓練により、言語能力が改善すると描画が稚拙になった（Selfe, 1977）。また浜谷・木原（1990）の事例でも5歳の時に既に遠近法を用いていたが、コミュニケーションが取れるようになると描画が稚拙になったという。他に寺山（1996）の事例では、描かれる対象が限られ長期間続く傾向があったが、その範囲内でも形態は少しずつ変化し、細部がより正確に描かれるようになる。長期にわたれば対象物が変化することがあり、描画が認知発達を示す可能性が考えられる ・定型発達児の多くがたどる描画発達段階を飛び越えて写実画を描く事例など特異な発達が報告されているが（石井，1962；Self, 1977）、多くの場合はそのような現象は認められず、定型発達児に比較して遅い発達経過を辿るが概ね定型発達群と同じ描画発達段階を経ることが確認された（松瀬・若林，2001）。また同時に質的な偏りも観察された（描画技法を参照） ・描画発達の独自性：通常は精神年齢が5.5歳のときに、知的写実期から視覚的写実期へと移行する傾向があるが、PDDの場合は精神年齢と描画の発達段階とは独立している（Charman & Baron-Cohen, 1993）。 ・無発語の段階ではScribeを描くものが多く、<u>オウム返し・単語の段階はDiagram・Designを、二語文・文章を話せる段階になるとPictureを描くものが増える</u>といったように描画発達と言語発達には連関が認められた。Diagram・Designを描ける段階になって、「絵を描いてください」という課題に対して、アルファベットや数字を描く者が始め、DesignからPictureを描ける段階になって興味・関心のあるものを繰り返し描き続ける傾向がある ・5歳代が描画発達の1つの転換期と考えられ、この時期にどのような絵を描いているかで、自閉症児の発達の程度をある程度推測できる可能性がある（松瀬・若林，2001） ・自閉症児の描画の発達過程の研究の中で、自分一人では描くことが出来ない事例があり、治療者がわずかに触れるだけで描き始める（表出援助法：Facilitated communication）を松瀬（2002）は確かめている。<u>描けない要因として「指示待ち」、「不安とこだわり」を取り上げている</u>
<p>その他</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・社会性や自他の分化という視点から、自閉症群は性差や自他の区別が未分化である（Lee & Hobson, 2006） ・絵を描くときに知識が不足しているのではなく、<u>アイデアを引き出す想像力に障害がある</u>（Lewis & Boucher, 1991）。

Table4での描画特性を手がかりに、我々はPDD者の内的世界や認知特性をどこまで理解し、支援につなげていくことが出来るであろうか。このような視点に立ったときFreeman (1980)の描画の成立過程が参考になる。Freeman (1980)によれば、描画は一種の問題解決事態であり、その過程には以下の4つの心的作業が含まれているという。Freemanによって示された描画の問題解決は、ロールシャッハ・テストの反応産出過程のプロセスに非常に類似していることに気がつく。

- ① 描こうとする対象を思い浮かべる
- ② その対象の部分同士や部分と全体との関係をリハーサルする
- ③ 紙の上にどのような順序で描いていくかを定める
- ④ 描画の進行中、うまくいっているかどうか、次のステップにうまくつながるかどうかがモニターする

(2) 描画法を媒介とした支援法

木谷 (2008) は、HFPDD児の場合、人物画やバウムテストといった使用頻度の高い臨床描画法では、描画への苦手意識もあり、単純化や棒人間といった防衛が働くことがあることを指摘している。この場合は、別の方法として臨床描画法の応用技法である○△□物語法があり、この技法は単純な刺激かつ新奇な描画内容から構成されるため、描画への抵抗が少なく、動機も維持されやすいため、PDDの主観的な世界が視覚的に表現されやすいことを木谷は臨床例を通じて示している。木谷の実践例から描画を心理査定だけでなく、臨床心理学的援助や発達支援にも十分応用できることがうかがえる。

4. おわりに

杉山 (2002)によれば、発達障害にとって描画は、言語的ハンディキャップを補完する自己表出の手段であること(内的世界をうかがう優れた窓)、日々の生活を支える大切な趣味であること(余暇)、社会的スキルの学習への援用(治療)という特徴を有している。

特に描画が発達障害児の自己の内的世界を映し出す優れた窓であることについては多くの臨床家の指摘がある(杉山, 2002; 川崎, 2002; 木谷, 2003)。また援助的な視点で言えば、PDD者の認知の準拠枠そのものを支援者が共有し、PDD者を取り巻く環境や外的世界の意味すなわち内的世界を支援者自身が解釈し直す機会(木谷, 2003)を描画は与えてくれる。支援者は、描かれた絵を彼らが生きた証(杉山, 2002)や彼らから見た景色として受け止め、理解していく姿勢が必要であろう。

文献

- Arnheim,R.(1980) The puzzle of Nadia's drawing. *The Arts in Psychotherapy*, 7(2), 79-85.
- Ayres, A.J.(1974). *The Development of Sensory Integrative Theory and Practice: A Collection of the Works of A. Jean Ayres*. Kendall/Hunt Pub Co(佐藤剛訳 1988 エアーズ研究論文集: 感覚統合の理論と実際. 協同医書出版社, Pp. 257-266).
- Charman T. & Baron-Cohen, S. (1993) Drawing development in autism: The intellectual to visual realism shift. *British journal of developmental psychology*, 11(2), 171-185.
- Eames, K. & Cox, M. V. (1994) Visual realism in the drawings of autistic, Down's syndrome and normal children. *British journal of developmental psychology*, 12(2), 235-239.
- Fein, D., Lucci, D. & Waterhouse, L.(1990) Fragment Drawing in Autistic Children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 20(2), 263-269.
- Freeman,N.H.(1980) Strategies of representation in young children. Academic Press.
- 藤本由紀子・磯部滋子・山田伊久子・伊藤健次(1991) 自閉症児の描画行動: DAM 人物画知能検査における特徴. 日本教育心理学会総会発表論文集, (33), 867-868.
- 古屋みゆき(1982) 精神薄弱児の人物画における情緒指標の検討. *心理測定ジャーナル*, 18(8), 7-12.
- 浜谷直人(1990) 自閉的障害者の描画行動: 事例研究. *東京都立大学人文学部人文学報*, 34, 1-27.
- 浜谷直人・木原久美子(1990) 自閉症児の特異な描画技法の発達過程. *教育心理学研究*, 38(1), 83-88.
- 畠山三郎太(1984) 発達障害児の人物画: Body proportionの発達の变化. *情緒障害教育研究紀要*, 3, 71-74.
- 一門恵子・山下功(1983) 自閉症児の対人認知について(I): 人物画を通して. *熊本大学教育学部紀要(人文科学)*, 32, 131-139.
- 今村重孝・藤沢逸恵・小松礼子・伊藤秀子・小林普美子・藤野ひろみ(1969) 自閉症児の描画に関する研究. *小児の精神と神経*, 9(1), 1-11.
- 石井高明(1962) 1 自閉症児の精神発達の考察. *児童精神医学とその近接領域*, 3(4), 63-79.
- 金田智子(1982) 自閉傾向を示す重度学習障害児に見られる人物画テストの変化. *障害児の診断と指導*, 1-2, 日本文化科学社, Pp.6-13.
- 川崎千里(2002) 広汎性発達障害の地域療育と描画. *臨床描画研究*, 17, 37-46.
- 木船憲幸(1980) 精神薄弱児の人物画知能検査の併存的妥当性に関する研究: 田中ビネー知能検査を基準として. *特殊教育研究*, 17(3), 50-54.
- 木船憲幸(1984) 脳性マヒ児の人物画知能検査の併存的妥当性: WISC-R、ベンダーゲシュタルトテストとの関係. *特殊教育研究*, 22(1), 1-6.
- 木船憲幸(1995) 精神遅滞児の人物画に関する基礎的研究. *風間書房*.
- 木船憲幸・中島聖奈子(1988) 精神薄弱児における人物画発達検査の併存的妥当性. *特殊教育研究*, 26(3), 41-48.
- 木谷秀勝(2003) 高機能自閉症児の内的な世界への理解について: 学校不適応で来談した2事例の描画からの分析. *臨床描画研究*, 18, 158-172.
- 木谷秀勝(2008) 描画による広汎性発達障害児の理解と対応:

- 「広汎性発達障害児として生きる」視点から. 臨床描画研究, 23, 35-48.
- 小林重雄(1977)グットイナフ人物画知能検査ハンドブック. 三京房.
- 児玉省・品川不二郎(1963)WISC 知能診断検査法. 日本文化科学社.
- 近藤智栄美(1998)LD およびその周辺の子どもの人物画. 臨床描画研究, 13, 57-70.
- 近藤智栄美(2003)アスペルガー障害児の人物画の発達. 臨床描画研究, 18, 173-195.
- 是枝喜代治・東條吉邦(2004)自閉症児の身体意識能力の特性：運動模倣と人物画の評価から. 国立特殊教育研究所分室一般研究報告書：自閉性障害のある児童生徒の教育に関する研究, 7, 65-70.
- 小坂礼美・生天目聖子・中村美乃里・中川清和・十一元三(2008)不登校相談機関に來談した広汎性発達障害の児童生徒における描画特徴—バウムと人物画の検査所見について— 第48回日本児童青年精神医学会総会, 156.
- 栗田廣・中野知子(1997)発達障害児での人物画描画能力に関する研究. 平成9年度厚生省心身障害研究「ハイリスク児の健全育成のシステム化に関する研究」, Pp.139-140.
- Lee, A. & Hobson, R.P.(2006) Drawing self and other : How do children with autism differ from those with learning difficulties. *British journal of developmental psychology*, 24(3),547-565.
- Lim, HK. & Slaughter,V.(2008)Human Figure Drawing by Children with Asperger's Syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 38(5), 998-994.
- Lewis,V. & Boucher, J. (1991)Skill, content, and generative strategies in autistic children drawings. *British journal of developmental psychology*, 9(3), 393-416.
- 眞田英進(1980a)精神遅滞児における人物画(DAM)知能検査の検討：WISC 検査との相関を中心として. 佐賀大学教育学部研究論文集, 28(1), 209-215.
- 眞田英進(1980b)精神遅滞児における描画能力に関する研究：人物描画とベンダー図形模写からの検討. 佐賀大学教育学部研究論文集, 28(2), 217-223.
- 松田善衛(1973)精神薄弱児の描画能力の実際. 精神薄弱研究, 179, 44-56.
- 松瀬留美子(2002)自閉症児の描画における表出援助. 臨床描画研究, 17, 136-146.
- 松瀬留美子・若林慎一郎(2001)自閉症児の描画表現に関する発達の研究—言語発達と描画発達と関連について— 小児の精神と神経, 41 (4), 271-279.
- Milbrath,C. & Siegel,B.(1996) Perspective taking in the drawing of a talented autistic child. *Visual-Arts-Research*,22(2),56-75.
- 満田健人・明齋光宜・辻井正次(2009)PF スタディ反応における広汎性発達障害児と定型発達児の比較研究. 小児の精神と神経 49(3), 221-230.
- 望月知子(2008)高機能広汎性発達障害児の描画にみられる認知の特性について— WISC- III と DAM・自由画からの検討— 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 11, 72-85.
- 森永良子・野本智子(2001)学習障害(LD)のタイプと人物画. 臨床描画研究, 16, 43-68.
- 毛利恵美子(1991)自閉性発達障害児の描画能力：事例研究. 群馬県立女子大学紀要, 11, 89-100.
- 村上靖彦(2007)二次元空間論：自閉症児の描画と知覚. 現代思想, 35(7), 青土社, 212-223.
- 明齋光宜・内田裕之・辻井正次(2005)高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応(2)：反応様式の質的検討. ロールシャッハ法研究, 9,1-13.
- 明齋光宜・辻井正次(2007)高機能広汎性発達障害と統合失調症におけるロールシャッハ反応の特徴：反応様式の質的検討. ロールシャッハ法研究, 11,1-12.
- 永田雅子(1999)心理検査から：知能テスト他. 杉山登志郎・辻井正次編 高機能広汎性発達障害：アスペルガー症候群と高機能自閉症. プレーン出版. Pp.74-83.
- 長崎志徳(1990)中枢性運動障害児の身体表象と空間認知. 大阪教育大学障害児教育研究紀要, 13, 51-67.
- 長嶋瑞穂(1997)自閉児の発達段階の移行：段階Ⅱから段階Ⅲへの移行の事例研究. 島根女子短期大学紀要, 35,17-24.
- 中野知子・勝野薫・栗田広(1992)発達障害児における人物画描画能力と自閉的傾向の程度との関係. 乳幼児医学・心理学研究, 1, 39-42.
- 中山建・市川正嗣・松田素子・立川和子・二上哲志・前川久男(1996)学習障害児の人物画知能検査の検討. 小児の精神と神経, 36(2),135-145.
- 野本智子(2000)人物画からみた学習障害児の特性. 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 4, 28-39.
- 大城理恵・神園幸郎(2007)高機能自閉症児における社会性の発達と描画の変化. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要, 9, 81-92.
- 寺山千代子(1996) 自閉症児の描画能力の発達. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 23, 61-67.
- 寺山千代子(2002) 自閉症児・者の描画活動とその表現. 臨床描画研究, 17, 5-21.
- 寺山千代子・東條吉邦(1998)自閉症児・者の描画表現の特徴. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 25, 75-83.
- 澤田武(1984)発達障害児の描画における色彩使用の傾向. 情緒障害教育研究紀要, 3, 47-50.
- Seifert,CD (1988) The Human-Figure Drawing in the treatment of an Autistic Adolescent. *Child Psychiatry and Human Development*, 18(3), 181-188.
- Selge,L.(1977)Nadia: a case of extraordinary drawing ability in autistic child. Academic Press.
- 志水かおる・長田洋和・中野知子・渡辺友香・栗田広(2003)広汎性発達障害(PDD)児と注意欠陥/多動性障害(AD/HD)における人物画描画能力の比較. 精神医学, 45(12), 1305-1311.
- 末次絵里子(2003)発達障害児の心理アセスメントとしての人物画テストとその活用について. 臨床描画研究, 18, 196-210.
- 杉山登志郎(2002)発達障害の臨床における描画の意味：自閉症の描画を中心に. 臨床描画研究, 17, 22-36.
- 多田建治・窪田陽呂子(1980)精神薄弱児の人物画の発達について：普通児との比較. 金沢大学教育学部教科教育研究, 15, 61-75.
- 田原裕子・菅原康之(1996)発達障害児の描画：自己と外界の構成を中心に. 情緒障害教育研究紀要, 15, 89-96.
- 田辺正友・田村浩子(1986)精神遅滞児の図形模写能力(2)：図形模写と人物画との関連. 特殊教育学研究, 25(3), 49-55.
- 田辺正友・田村浩子(1987)精神遅滞児の人物描画における身体像の発達. 特殊教育学研究, 25(3), 49-55.
- 田辺正友・田村浩子(1988)精神遅滞児の人物画表現発達：縦断的分析によるアプローチ. 奈良教育大学紀要, 37(1), 61-72.
- 田辺正友・田村浩子(1989)精神遅滞児のボディ・イメージの

- 発達. 奈良教育大学紀要, 38(1), 83-92.
- 田村浩子(1987)自閉性障害児の描画表現発達: 人物画の発達
的変容に焦点をあてて. 障害者問題研究, 50, 34-46.
- 田村浩子・田辺正友(1991)ひとりの自閉症候群児の描画表現
発達. 障害者問題研究, 67, 76-86.
- 田中昌人(1977)発達における「階層」の概念の導入について.
京都大学教育学部紀要, 23, 1-13.
- Tomas.G.V. & Silk A.M.J. (1990) An introduction to the
psychology of children's drawing(中川作一監訳 1996 子
どもの描画心理学. 法政大学出版局).
- Tustin,F.(1972) Autism and Childhood Psychosis.
Hogarth(斎藤久美子監修・平井正三監訳・辻井正次他訳
2005 自閉症と小児精神病. 創元社).
- 渡辺友香・長沼洋一・瀬戸屋雄太郎・長田洋和・立森久照・久
保田友子・栗田広(2002)広汎性発達障害(PDD)児および精
神遅滞児における人物画描画能力の比較研究精神医学 44(4),
391-399.
- 和田野康子(1997)豊かな趣味を楽しむ自閉症のY子さん. 発達,
18(70), 96-103.